

『誰にも知られず』 作…ポチ子

居酒屋

ザワザワと騒がしい店内。

男 1 「誰にも知られずにさ、死んでく奴もいるんだよな。」

男 2 「なんの話だよ。」

男 1 「佐々木、劇団辞めるってさ。」

男 2 「ああ、知ってるよ。実家の焼肉屋継ぐんだろ？いいよなー、家業がある奴は。辞めても、就職先がすぐ見つかってよ。

んで、佐々木が何？あいつ死んでないぞ。」

男 1 「分かってるよ。ただ、大した役も貰えず、何年も底辺這いつくばってさ、結局辞めるんだなと思って。」

男 2 「うわあ、刺さるね、その言葉。まるで、お前と俺のことを言っているようだ。まあ、しょうがないんじゃないじゃね？佐々木も歳だしさ、色々これからの事考えたんだろうよ。」

男 1 「佐々木と俺ら、同い年だろ。」

男 2 「……俺らも歳だってことさ。」

男 1 「なあ誰にも知られずに、生きていく意味ってあると思うか？」

男 2 「……芝居の話か？」

男 1 「底辺役者続けて、結局誰にも知られず、目も向けられず、最後は佐々木みたいになんか捨てて。誰にも知られず生きて、勝手に死んでく。そんなの最初から死んでいてみたいだろ。」

男 2 「ふっ、なんだよ感傷に浸りたい時期か？病むのは良いけどさ、突然音信不通になったりすんなよー。」

男 1 「感傷か……。そうかも、しれないな。」

男 2 「すみませーん、檸檬サワーください！そんな時はさ、酒飲むのが一番だぜ？ほら、飲めよ。割り勘だけどな？」

男 1 「俺、役者辞める。」

男 2 「……おう、そっか。もう、団長には言ったのか？」

男 1 「いや、まだ言ってない。明日、言うつもり。」

男 2 「辛気臭い顔してると思ったら、なんだよ、そういうことか。次は何するか決まってるの？」

男 1 「特には決めてない。」

男 2 「まあ、何とかなるっしょ。いざとなれば、実家に帰ればいいし。」

男 1 「おう。」

男 2 「……お前も死ぬんだな。」

男 1 「……ああ。」